

# 倭姫命巡行



## 『倭姫命(やまとひめのみこと)の旅～天照大神を伊勢へ導いた皇女～』



近年あきらかになりつつある実年代で3世紀初頭、第10代崇神天皇の時代(津田左右吉氏の説によると初代が1世紀で、10代は3世紀)に、疫病が流行り、人民の多くが亡くなり、作物が取れない状態となった。日本書紀(720)や皇大神宮儀式帳(804)によると、それにより天照大神を笠縫邑に遷したとある。さらに新しい倭姫命世記(鎌倉期)は次のように記している。

御間城入彦五十瓊殖天皇の即位六年己丑歳秋九月、倭笠縫邑(※)に磯城の神籬を立てて、天照大神と草薙の劔を遷し、皇女豊鋤入姫命に奉斎せしめた。

(※)

1. 桧原神社(桜井市三輪の大神神社摂社)
2. 笠山坐神社(笠山荒神社)桜井市笠 2415
3. 天神社 桜井市小夫(おぶ) 3147
4. 磯城郡田原本町の秦楽寺(真言律宗)にある笠縫神社
5. 磯城郡田原本町のおお神社

6. 田原本町の多(おお)神社の東にある多神社摂社・姫皇子命神社
7. 大神神社
8. 穴師坐兵主神社（当麻蹶速と野見宿禰が相撲を取った相撲神社が境内にあることで知られる。桧原神社の北）
9. 飛鳥坐神社
10. 大神神社から山の辺の道を南に進むと「磯城瑞籬宮址」（崇神天皇）の石柱のある志貴御県坐(しきのみあがたにます)神社
11. そのほか『倭姫命御巡幸地』（片山景空氏著）は大神神社摂社の狭井神社をあげている。



1. 桧原神社



2. 笠山坐神社



3. 天神社

神武天皇以後九代のあいだは「同床共殿」であったが、神の勢いを畏れられるようになり、共に住むこと安らかでなくなられ、齋部氏をして鏡と剣を新たに铸造せしめられて「護身の璽（しるし）」とされるようになった。今の践祚の日に奉じる「神璽の鏡剣」は、これである。

### 三十九年壬戌

但波の吉佐宮に遷られ、四年間、齋きまつた。ここから更に倭（やまとの）国へ求められた。この年に 豊宇介神(とようけのかみ)が天降って御饗（みあえ）を奉った。



籠神社

### 四十三年丙寅

倭国の伊豆加志の本宮（巖櫃之本宮）に遷られ、八年間、齋きまつた。



與喜天満神社

### 五十一年甲戌

木乃国の奈久佐の浜宮（名草の浜宮）に遷られ、三年間、齋きまつた。この時、紀国造が舍人紀麻呂と地口の御田を進った。



日前神宮

### 五十四年丁丑

吉備国の名方の浜宮に遷られ、四年間、齋きまつた。この時、吉備の国造が采女吉備都比売と地口の御田を進った。



伊勢神社



内宮



穴門山神社

## 五十八年辛巳

倭の弥和乃御室の嶺の上の宮（美和之御諸の宮）に遷られ、二年間、齋きまつた。この時、豊鋤入姫は「吾、日数が満ちました」といって姪の倭姫命に任務を預けられ御杖代とされた。これ以後、倭姫命が天照大神を戴きまつて御幸された。

## 六十年癸未

大和国宇多の秋宮（宇太の阿貴宮）に遷られ、四年間齋きまつた。この時、倭の国造が采女香刀比売と地口の御田を進った。

大神が倭姫の夢のなかに現われられ「高天の原に坐して吾が見し国に、吾を坐せ奉れ」とさとされた。倭姫は東に向かい、うけいして「我が心ざして往く処、吉ということであれば、未嫁夫の童女に逢いますように」といって御幸した。すると佐々波多（菟田篠幡）の入り口で童女が現われた。「汝は何という名か」と問われると「私は天見通命の孫、八佐加支刀部（別名、伊己呂比命）の児で、宇太乃大宇禰奈と申します」と申した。

また「みともに従い仕え奉らむや」と問われると「お仕えいたします」と申した。そこで、お伴に従って仕えまつる童女を大物忌と定め、天の磐戸の鑰(かぎ)をあずけ「黒（きたな）き心を無くして、丹（あか）き心を以ちて、清く潔（いさぎよ）く齋み慎み、左の物を右に移さず、右の物を左に移さずして、左を左とし、右を右とし、左に帰り、右に廻る事も、万事違う事なく、太神に仕えまつれ。元（はじめ）を元とし、本を本とするゆえである」とさとされた。

弟の大荒命も同じく仕えた。宇多の秋宮より御幸され、佐々波多の宮に鎮座された。



阿紀神社



篠畑神社

## 六十四年丁亥

伊賀国隠市守宮(なばりのいちもりのみや)に御幸され、二年間奉齋された。



宇流富志禰神社

## 六十六年己丑

同国穴穂宮(あなほのみや)に御幸され、四年間奉齋された。

伊賀の国造は、籠山(みふじやま)の葛(くろかづら)、山戸(やまのへ)並びに地口の御田とともに、朝の御饌・夕べの御饌に供する鮎取る淵・梁(やな)作る瀬などを進った。



神戸神社

## 活目入彦五十狭茅天皇の即位二年癸巳

伊賀国の敢都美恵宮(あえのつみえのみや)に御幸され、二年間奉齋された。

四年乙未、淡海国甲賀の日雲宮に御幸され、四年間奉齋された。この時、淡海の国造がやってきて地口の御田を進った。

八年己亥、同国坂田宮に御幸され、二年間奉齋された。この時、坂田君がやってきて地口の御田を進った。



都美恵神社



日雲神社



坂田神明宮

## 十年辛丑

美濃国伊久良河宮に御幸され、四年間奉斎された（次に、尾張国中嶋宮に御幸され、倭姫命は国寿ぎされた）。この時、美濃の国造等は、舍人市主と地口の御田を進り、御船一隻を進った。

同じく美濃の県主は、角鐮（つのかぶら）を作り、御船二隻を進った。その時に「ささぐる船は天の曾己立、抱く船は天の御都張（みとぼり）」と申上げて進った。また、采女忍比売と地口の御田を進った。忍比売の子がうけ継いで天の平瓮八十枚を作って進った。



天神神社



酒見神社

## 十四年乙巳

伊勢国桑名の野代宮(のしろのみや)に御幸され、四年間奉斎された。この時、国造大若子が現われて御供に仕え奉った。そこで、国内の風俗（くにぶり）を奏上させた。

また、国造の建夷方命(たけひなかたのみこと)が参上した。「汝が国の名は何ぞ」と問われると「神風の伊勢国です」と申した。そして舍人として弟の伊尔方命(いにかたのみこと)を進り、また地口の御田と神戸を進った。大若子は、舍人として弟の乙若子を進った。



野志里神社



神館神社



城南神社

次に、川俣県造の祖の大比古命(おおひこのみこと)が参上した。「汝が国の名は何ぞ」と問われると「味酒(うまさけ)鈴鹿国、なぐはし忍山(おしやま)です」と申した。そして神の宮を造り奉って御幸せしめた。また神田・神戸を進った。



忍山神社

次に、阿野県造の祖・真桑枝大命(まくわしのおおみこと)が参上した。「汝が国の名は何ぞ」と問われると「草蔭(くさかげ)の阿野国です」と申した。そして神田・神戸を進った。



布氣皇館太神社

次に、市師(一志)の県造の祖の建皆古命(たけしこのみこと)が参上した。「汝が国の名は何ぞ」と問われると「害行(あらゆく)阿佐賀国」と申した。そして神戸・神田を進った。

## 十八年己酉

(阿佐加<上記の阿野の誤記か>の)藤方片樋宮(ふぢかたのかたひのみや)に御幸され、四年間奉斎された。この時、阿佐加の嶺に坐す神は、百人往く人を五十人取り殺し、四十人往く人を二十人取り殺していた。倭比売命は、朝廷に大若子を派遣し、その神の事を奏上すると、天皇は「種々の大手津物(おおたなつもの)をその神に進り、柔(やわ)らかくし、平らげくし奉れ」と詔された。



加良比乃神社

そこで、阿佐加の山の嶺に社を作られ、その神をしづめ、労(ね)ぎ祀られた。神は「うれし」と詔ったので、そこを名づけて「宇礼志(嬉野)」という。

その地を通過される時に、阿佐加の加多(湾)を支配していた多気連の祖、宇加乃日子の子である吉志比女、吉志彦に出遭われた。「汝らが

あざる物は何ぞ」と問われと「皇太神の御贄に奉ろうとして、きさがい（赤貝）をあざっております」と申した。

「白すこと、恐（かしこ）し」とおっしゃって、きさ貝を太神の御贄に進り、佐之牟（灌木の「さしぶ」のこと）の枝を取って、生（いけ）きりで火を鑽（き）らせる（なま木のままで火を起こすこと）と、発火した。

そこで、采女の忍比売がその火で土器を焼いて天の平瓮（ひらか）八十枚（やそひらて）を作って、伊波比瓶（いわひへ：祭器）として進った。吉志比女は、地口の御田・麻の園を進った。

（一書に曰く、天照太神、美濃国より廻って安濃の藤方の片樋宮に到り鎮座された時に、安佐賀の山に荒ららしい神がいて、百人往く人があれば五十人死なしめ、四十人往く人があれば二十人死なしめた。これに因り、倭姫命、度会郡宇遲村五十鈴川上の宮に向かって進めず、藤方の片樋宮でしばらく奉斎した。時に、安佐賀の荒ららしい神の為行くしわざを、倭姫命は、中臣の大鹿嶋命・伊勢の大若子命・忌部の玉櫛命を朝廷に戻らせて天皇に報告された。天皇が申されるに「その山は、大若子の祖先である天日別の平らげた山である。大若子にその神と交渉させ倭姫命を五十鈴の宮に入らしめよ」とのことであった。そこで、種々の幣帛を持たしめ大若子をして山の神を祭らしめた。すると、やすらげく平らげくすることができ、山の神の社を安佐賀に祀った。こうして、倭姫命はそこを通過することができた）

## 二十二年癸丑

飯野の高宮に御幸され、四年間奉斎された。この時、飯高の県造の祖、乙加豆知命（おとかつちのみこと）が参上した。「汝が国の名は何ぞ」と問われると「（いすひの）飯高国です」と申して、神田・神戸を進った。倭姫命は「飯高しと白すこと、貴し」と悦



飯野高宮神山神社

ばれた。

次に、佐奈の県造の祖、弥志呂宿祢命(みしろのすくねのみこと)が参上した。「汝が国の名は何ぞ」と問われると「(こもりくの) 志多備の国(まくさむけ) 草向かう国です」と申し、神田・神戸を進った。

また大若子に「汝が国の名は何ぞ」と問われると「百張(ももはる)蘇我<伊蘇の誤りか>の国、五百枝刺(いおえさす)竹田の国(式内竹神社があり、現在は多気郡という)です」と申し。その処で倭姫命の御櫛が落ちたので、その地を櫛田と名づけ、櫛田の社を定められた。

そこから船に乗って御幸された。河後(かわじり)の江で魚が自然と寄り集ってきて御船に乗った。倭姫は、それを見て悦ばれ、魚見(うおみの)社(式内魚海神社がある)を定められた。

さらに御幸されると、御饗(みあえ)を奉る神が現われた。「汝が国の名は何ぞ」と問われると「(白浜の) 真名胡の国です」と申し。その所に真名胡神社を定められた。

また、乙若子が麻の神(麻で作ったひとがた)・草の霊(藁<わら>で作ったひとがた)を倭姫命に進った。そこで、それを祓具として祓えを行った。その祓えが陪従の人に及んだとき、帯びている弓や劔をおさめさせられた。それにより倭姫命は兵と共に飯野の高丘から五十鈴宮に向かうことを得られた。

(それ以来、天皇の御子、斎王、馭使、国司に至るまで、ここを通行する際には、この川の川辺で祓をなさしめ、鈴の音を止めることとなったが、この時の由来による)

さらに巡幸して、佐々牟江に船を泊め、そこに佐々牟江宮を造って遷座された。大若子命は「白鳥の真野の国」と国寿(ほ)ぎ申し上げた。そこに佐々牟江社を定められた。

そこから御幸する間、風や波はなく、潮の流れは大



竹佐々夫江神社



竹大與杼神社

淀に淀んで船を順調に進めることができたので、倭姫命は悦ばれて、その浜に大与度社を定められた。

### 二十五年丙辰春三月

飯野の高宮より遷幸して 伊蘇の宮に到着された。この時、大若子命に「この国の名は何ぞ」と問われると「百船(ももふね)の度会国、玉綴(たまひろ)伊蘇の国です」と申して、御塩の浜と御塩を焼くための竈のたきぎを採る林を奉った。しばらくこの宮に滞在された。そこには水が湧く井戸があった。そこでその地を御井となづけられた。



磯神社

倭姫は「南の山の末(は)を見ると、よき宮処があるように見える」とおっしゃった。そこで宮処を求めるために大若子をして案内せしめられた。倭姫は、皇太神を奉戴して小船に乗られ、その船に雑々(くさぐさ)の神宝(神様の櫛や手鏡などの調度品)・忌楯・忌杵などを積み替えて小河を進まれた。

(積載量の多くを後部に積み込みんだため)小船の後ろが下がり前が立ってしまった。そのため、駆使(はゆまづかい、儀式帳では護衛兵としての安倍武沼川別命以下五柱)が「御船うくる(前が浮く、もしくは後ろが後れる。つまり後部が下がって前進できない)」といった。そこで、この地を「宇久留」と名付けられた。そこで(積み荷のバランスを修正し)その地より御幸されると、速河彦が参上した。「汝が国は何というか」と問うと「(あぜひろの)狭田(さた)の国です」といって神田を奉った。そこで狭田の社を建てた。その地より御幸されると高水の神が参上した。「汝が国は何というか」と問うと「(おかだか、たぶか)坂手の国です」といって神田を奉った。そこで坂手の社を建てた。

その地より御幸されると川がつかた。その川の水は冷たかった。そこでその地を「寒川」と名付けられた。その地に船を繫留し、御船神社を建てた。そこから御幸された時、御笠（竹で編んだ日傘）を差し掛けて前進された。そこでその地を「加佐伎（かさき）」となづけられた。

大川（宮川）の瀬を渡ろうとされると、鹿の宍（ししむら）が流れてきたので「（ここを渡るのは）悪（あ）し」といって渡られなかった。そこで、この瀬を「相鹿瀬（おうかせ）」と名付けられた。

そこから川上を指して御幸されると、砂が流れてくるような速瀬があった。時に真奈胡神（まなこのかみ）が参上し、御船をお渡しした。そこでその瀬を「真奈胡の御瀬」と名付けられて御瀬の社を定められた。



多岐原神社

そこから幸行して美しき地に到った。真奈胡神に「この国の名は何というのか」と問われると「（大河の）滝原の国です」と申した。その地に、宇大の天宇祢奈をして荒草を芟りはらわしめ、宮を造って鎮座された。ところが、この地は、皇太神の希望されるところではないというおさとしがあつた。



瀧原宮

その時、大河の南道より宮処を求めて御幸すると、美（うま）し野に到った。よい宮処を求め得たことを、侘び（感謝）して、そこを和比野となづけられた。

そこから御幸すると、久求都彦(くぐつひこ)が参上した。「汝が国の名は何ぞ」と問われると「(久求の小野です)」と申した。



久具都比売神社

倭姫命は詔して「この宮処を久求小野(くぐのおの)」となづけられ、久求の社を定められた。

時に、久求都彦が「吉き大宮処があります」と申したので、そこに御幸されると、園作りの神が参上して、御園の地を進った、それを悦ばれて園相(そのあう)の社を定められた。

さらに御幸されると、美(うま)し小野が有った。倭姫命はそれを愛(め)でられて、そこを目互野となづけられた。その森に円(つぶ)らな小山があった。そこでその地を都不良(神鳳抄では積良)となづけられた。

そこから御幸されると、沢への道がある野があった。そこで沢道の小野となづけられた。

その時、大若子が、河から御船を率いて、お迎えに参上した。倭姫命はいたく悦ばれ「吉き宮処ありや」と問われるた。大若子は「さこくしろ宇遅の五十鈴の河上に、吉き御宮処あり」と申した。

倭姫命が悦ばれ、問われるに「此の国の名は何ぞ」と問われると「(みふねむこう) 向田国(むこうだのくに)です」と申した。

御船に乗って御幸し、忌楯・忌杵と種々の神宝を留め置いた。その地の名を忌楯の小野となづけられた。

そこから御幸すると小浜があり、鷲（わし）を取る老翁（おきな）に出遭った。倭姫命が「御水（おもひ）を飲みたいのですが」と詔して「何処（いづく）に吉き水がありますでしょうか」と問われた。すると老翁（おきな）は、寒き（つめたい）御水を以ちて御饗として奉った。

それを讃（ほ）めて水門（みなと）に水饗（みずのあえ）の社を定め、浜の名を鷲取の小浜となづけた。

こうして二見の浜に御船を繫留し、大若子に「この国の名は何ぞ」と問われると「速雨（はやさめ）の二見の国です」と申した。

永くその浜に御船を留めて坐す時に、佐見都日女が参上した。「汝が国の名は何ぞ」と問われると、詔を聞かず何も答えずに、堅塩を以ちて多き御饗を奉った。

倭姫命は慈しんで堅多（かただ）の社を定められた。乙若子はその浜に御塩と御塩山（塩焼きのための木を伐る山）を定め奉った。



堅田神社

そこから御幸して五十鈴の河後（かわじり）の江にいたると、佐美川日子が参上した。「この河の名は何ぞ」と問われると「五十鈴の河後です」と申した。その処に江の社を定められた。



江神社

また荒崎（こうざき）姫が参上した。国の名を問うと「皇太神の御前の荒崎です」と申した。「恐（かしこ）し」と詔して、神前（こうざき）の社を定められた。



神前神社

この江の上（ほとり）に御幸して御船を泊められた。その所の名を御津（みつ）の浦となづけられた。

さらに前方に御幸されると、小嶋があった。その嶋に坐して山の末（は）や河の内を見廻られると、大屋門（おおやとく大きな家の門）のようなどころがあつて、その前に平地があつた。そこで、その地に上陸され、その地の名を大屋門となづけられた。

さらに御幸して、神淵の河原にいらっしゃると、苗草を頭に戴く耆女（おうな）が現われた。「汝は何をする耆女ぞ」と問われると「我（あ）は苗草を取る女、名は宇遅都日女（うちつひめ）です」と申した。

また「どうして、かく（頭の上に苗を戴いて歩いている）為（す）るのか」と問われると、耆女は「この国は鹿乃見哉毛為（かのみやけ、す）」と答えた。

「どうして、そういう地名がついたのか」と問われると「止可売（鹿を来させないようにしている海）」と申した。そこで、そこを止鹿乃淵となづけられた。

そこから矢田の宮に向かつて御幸された。家田（やた）の田上の宮に遷幸し、その宮に坐す時、度会の大幡主命、皇太神の朝御饌・夕御饌の御田を定め奉った。宇遅の田之上にある抜穂田のことである。

そこから御幸し、奈尾之根宮（なをしねのみや）に座す時、出雲神の子、出雲建子命（いづもたけるこのみこと）別名、伊勢都彦神（いせつひこのかみ）別名、櫛玉命（くしたまのみこと）並びにその子、大歳神、桜大刀命（さくらおとじのみこと）、山の神・大山祇命、朝熊水門神（あさくまのみ

などのかみ)が、五十鈴川の後江（しりえ）で御饗を奉った。

その時、猿田彦神の裔（はつこ）宇治土公（うじのつちぎみ）の祖、太田命が参上した。そこで「汝が国の名は何ぞ」と問われると「さこくしろ宇遅の国です」と申し、御止代（みとしろ）の神田<神饌の稲を作る田>を進った。

倭姫命が「吉き宮処あるや」と問われると「さこくしろ宇遅の五十鈴の河上は、日本の国の中で殊に勝れた霊地です。その中に、翁（太田命）三十八万歳の間、未だ視知らざる霊地があります。照り耀くこと、日月の如くです。これ、小さき縁ではございません。きっと主（ぬし）がお出ましになるであろうと思い、その時に備えて、この場所をうやまいまつって参りました」といった。

そこでその地に往き到り御覧になると、昔、大神がうけいして豊葦原の瑞徳国の内の伊勢の風早の国によき宮処ありと見定められたところであり、天上から投げ降ろされた天の逆太刀・逆杵・金の鈴が、そこにあったので、はなはだ御心に喜びをいだかれ、その喜びを言上げされた。

二十六年丁巳冬十月甲子、天照太神を奉遷し、度会の五十鈴の河上に遷したてまつった。

2016年8月1日 第一刷発行

発行者 神社史研究会

会長：白山芳太郎

副会長：落合直人